タイトル未定（結構のりで書いてますから駄作です）

パンダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイトル未定（結構のりで書いてますから駄作です）

【Ｎコード】
Ｎ０３７５Ｏ

【作者名】
パンダ

【あらすじ】
死んだら「神にならない？」と誘われＹＥＳ答えた、体ができるまで暇だから異世界で遊んできていいといわれさらにチートな能力までもらったぜ、ラッキーさてはて体ができるまでどうするか悩むなー

注：ノリで書いてるのでよく修正したりします、それでもいいなら読んでください

プロローグ

「あなた、神になりなさい」

今俺がこんな意味不明な命令を受けてるのは何故か？それは

朝起きたら自分が死んでる事にきずいた

←

ちょっといきなり死んだ事に納得いかず、悩んでたら神降臨

←

「あなたは世界に殺されたのよ」と言われ

←

何故世界に殺されたのか聞く

←

俺の魂のかくが創造神＆破壊神が合わさった感じで、世界が危険視し排除

←

このままじゃ、生き返らせてもまた同じことが・・・そうだ！神にすればいいんだ！

ってな感じでこんな質問されてるのです、とりあえず、これを断ったら存在を消されたりされそうなのでＹＥＳと答えておきます

「じゃ、とりあえず仮の体をあげるわ、神の体は今から作り始めるから、できたら教えるわよ、それで仮の体だけど、なんか欲しい能力ない？あるなら付けるわよ」

「えーっと、その前に質問していい？」

「ええ、いいわよ」

「じゃあ、何で仮の体がいるのさ？」

「それはね、神の体ができるまで暇だろうから、適当な世界に送ってあげようかと思って」

・・・・え？マジで？マジなの？マジですか？キタキタキタキタキタキターー！おこればいいなって思ってた転生だよ！て！ん！せ！い！落ち着け俺！ｃｏｏｌになれ！ｃｏｏｌになるんだ！ふう、落ち着いたとりあえず、能力をもらおう

「じゃあ、今から言う能力をくれ。

一つあらゆる世界のエネルギーぞくに言う気とか魔力的な奴をくれ。

ああ、それと鍛えれば鍛えるほど強くなるようにしてくれよ、身体能力もふくめて

二つあらゆる世界の技や魔眼を使えるようにしてくれ

三つ創造、時間、空間の能力をくれ

四つあらゆる魔法アイテム技を改良、合体できるような才能をくれ。それと知識も

五つ瀕死から生き返ったら力が上がる的な能力をくれ

六つかなり高性能なダイオラマ魔法球をくれ

七つあらゆる才能をくれ

八つ不老不死にしてくれ、ただし物語が終わるまでいい」

「二つ目以外は何の問題はないはわ」

「二つ目はダメなのか？」

「いえ、ダメってことじゃないんだけど、無限の剣生成ができないだけよ、後は王の財宝なんだけど中身がないのよ、中身は自分で探すか作ってね、食べ物や飲み物位ならあげるから」

「ＯＫ大丈夫ないなら作ればいいわけだし、それと、投影は剣だけか？」

「いいえ、何でも可能にしといたけど、あくまで投影は見たことある物だけよ、創造魔法とはちょっと違うわ」

「ああ、わかった、教えてくれてあんがと」

「それと送った時の歳と容姿とどこの世界のいつの時代に行くか教えて頂戴。注意しておくけど修行しないと弱いままよ」

「年齢は５歳から２５まで変えられるように、行く世界はネギま、時代は大戦の５００年前で、容姿はかっこいいイケメンと、かわいいイケメンを合わせた感じね」

かっこいいイケメンと可愛いイケメンを合わせれば、笑えば可愛く、シリアスになればかっこよくなるはず！

「わかったわ、それじゃ、願いを叶えるわよ。覇っ！」

「サンキュ、そういえば俺、世界に殺されたんだろ？生き返らせても同じことになるんじゃないか？」

「それは問題ないわ、世界に殺されたのは魂が体を凌駕し過ぎたからなのよ、だからあなたにあげたその、チートボディでちょうど釣り合いが取れるってわけ」

ほうほう、なるほどなるほどー

「さて、そろそろ送らないといけないから送るわよ」

「ああ、いろいろありがとな、女神様」

そして、「それ！」と言う掛け声とともに床に穴が開き俺は落ちていった・・・・って！

「ここだけテンプレかよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！！！！！」

「それとっ！言い忘れてたけどっ！あなた最初はすごい弱いわよ！」

「はぁ！？え、ちょ！つまりどういうことですかーーーー！！！！！！！！」

プロローグ（後書き）

ああーやっぱ俺、文才ありませんね、神よー俺に文才をー！

主人公プロフィール

主人公設定

名前　大戦中に名乗る名前　神羅　零　前世の名前　青樹　零

容姿

髪の色は黒でショートヘアー

種族　人間

性別♂

性格　面白ければなんでもいい。たとえそれが悪であろうと、なんであろうと

戦闘スタイルは何でも使う

能力解説

時間魔法は時間旅行が出来るくらいまで使えるようになった

空間魔法は空間を繋げる事が出来る様になった（スキマの様な物と考えてもいい）

不老不死（ただしその世界の物語が終わるまで）

不老不死だが傷がすぐ治るというものではない、具体的にいうなら核がないピッコロさん

鈍感

オリ主なら大抵の人が持ってるスキル、褒めて照れたら「ん？風邪か？」頭なでたら「怒ってんのか？」というレベルの鈍感ある種の呪い。しかし、これがあると異性に好かれやすくなる

第1話「とりあえず、修行修行」

今俺は、ものすごい速さで空から落ちています、あははー

「って！現実逃避してる場合じゃねえ！早く何とかしないと！」

打開策は
1　魔力やら気やらで空を飛ぶ
2　このまま落ちる
1は気や魔力を完全に扱い切れてないし、2は・・・嫌だよ・・・あれ？落ちるしか選択しなくね？ってか色々思考してるうちに地面が！

「落ちるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！」

ドゴォォォォォォォォォン

「いっつー、しかしあんな高さから落ちてよく無事だな俺」

やっぱ身体能力でもあがってるんですかね？とりあえず自分の状態と荷物でも確認しよう
服は、普通の格好だな、容姿は鏡無いからわからん。ん？ポケットに何かあるな、手紙か？

『この手紙を読んでるってことは死んではない無いってことね。まず最初に言っておくけど、最初は弱いといったわよね。あなたは今、気や魔力的な物が全然無い状態よ。何か質問ある？』

いやいや！そんなんじゃすぐ死んじゃうでしょ！あ、でも俺不老不死だから大丈夫か

『あと、さすがにそれじゃあ、何度も殺されるかもしれないから創造、空間、時間、王の財宝は使えるようにしてるわ。
ダイオラマ魔法球はポケットの中よ、時間は最大１時間が４８時間、最小１時間が１分まで変えられるから。がんばって生きなさいよ。
力の使い方だけどイメージすれば使えるわ。じゃ、がんばってねー
ＰＳ：送った場所は魔法世界のどっかだからもしかしたら、魔物の巣が近くにあるかもね
ｂｙ神様』

とりあえず、暇だからちょいと探索するか、拠点とか決めないとめんどいし。それと、どんな魔物がいるかとか調べないと

・
・
・
・
・・・探索して分かった事が２つある、１つは、ここが竜の住む森だって事が
さっきからミョーに雄たけびがするからそっちの方に行ってみたら、竜同士が闘ってたんだよ。
もう１つは、家を発見した。家の中には骸骨があって、そばに手紙が置いてあった、どうやらこの人は変わり者だったらしい
俺はこの家を拠点にする事にした

まずはダイオラマ魔法球（これからはめんどいから魔法球でいいか）見たんだが、中に何も入ってなかったｏｒｚ
つまりこの竜が住んでる森からとってくるしか選択肢がないんだよ。
はあ、どうやったら安全に取れるかなー

・
・
そうだ！時間の魔法を使えばいいんだ！そうと決まれば練習だ！

～１０日後～

あー、やっと使えるようになった、最初は1分位しか使えなくて、
また使えるようになるには３０分位かかったんだが、今はもう自由
自在１日中使えるようになったぜ（ついでに魔力量も増えている）
さてと、そろそろ入れるか

～作業中～

やっとできた、とっとと入って修行するか

第1話「とりあえず、修行修行」（後書き）

はい、もうやっちゃいました、すいません適当にやりすぎちゃいました

第2話「初めての原作キャラ」

俺が魔法球で修行して外の時間で約3百年、外の世界で修行してはや数百年。え？その間の事？それはな、重力室作ったり、筋トレしたり、モンスター創ってダンジョン作ったり、新たな魔法球創ったり、色々な物を作ったり・・・まあ、色々あったってことさ。魔法世界のほうではいろんな木々を入れたり魔物を入れたりで、今じゃ魔法球は人外魔境みたいになっちゃったよ。
そして、今俺は旧世界で色々な武術や戦闘の役に立つものを習った。ちなみに神鳴流は1番最初に習いに行ったが追い返された。
そのあとは腕のいい鍛冶屋に弟子入り、自分にあう武器を作ってた。そんなこんなやってる内に、いつの間にやらジャックが剣闘士をやってる頃だと思うので会いに行った

～ジャックサイド～

今、俺は今大会の一番強い奴と向き合ってる。
だが今回こそ優勝して、奴隷から開放してやる！

～サイドエンド～

「さーて、始まりました今大会決勝戦！自称最強の奴隷剣闘士ジャック・ラカン選手！」
「自称は余計だ！」
「対するはー、不明！不明！不明！全てが謎だらけの仮面男ゼロ選手！」
ついでに言っとくが今俺は狐の仮面をかぶっている

「ジャックとやら、俺は占い師でね占いの結果が出たよ君は俺には勝てないと、そして手も足も出ないと」
「へっ、やってみなきゃわかんねえだろ。それに負けるのはてめえだ」
どうせ強がりだろう、戦績を見たがあんまり勝ってなかったし
「では、試合開始ぃぃぃ！！！！！！」
さて、ジャックよ俺の技の実験台になってくれ
「いくぞ！今思いついた技！啄木鳥！」
この技はつま先を気で刃物のようにして蹴るという単純な技だ
「うお！あぶね」
やっぱり簡単に避けられるか・・・だが、予想どうり！
『プラ・クテ・ビギナル　風よ』
俺は風でさっきの技で作った砂をジャックの周りになるべく濃くなるように飛ばす
「ハッ！こんな呪文唱えて、目くらましのつもりか？」
「いやいや、目くらましではないさ、ところで君知ってるかい？粉塵爆発っての」
「なんだそれ？」
「大気などの気体中にある一定の濃度の可燃性の粉塵が浮遊した状態で、火花などにより引火して爆発を起こす現象・・・だったかな？ま、つまり」
『プラ・クテ・ビギナル　火よおきろ』

俺は土煙を小麦粉に創り変えて魔法で作った火を投げ入れる
ドオォォォン！

「こうゆう事だ。合成魔法　エクスプロージョン（笑）」
「おおーっと決まったーーーー。ラカン選手ゼロ選手に言葉どうり手も足も出ませんでした！今回の大会の優勝者はゼロ選手です。おめでとうございます。」

なかなか楽だったな。しかし、ジャックは昔からバグキャラだったのか？いくらネタ技といえど気絶だけじゃすまないはずだぜ

「それでは、ゼロ選手一つ質問をしていいでしょうか？」
「ああ、いいぞ」
「ズバリ！賞金の使い方は？」
「ふむ、賞金の使い方は決まったそれは・・・」

あえて焦らす俺

「・・・その少年を買う事だ！で、いくらぐらいだい？そこの商人君」

恐らくジャックを連れ戻しに来たのだろう商人に話しかける

「ああー、そうだな優勝賞金で手を打とう」
「ふむ、いいだろうならば君に優勝賞金をやるとしよう。少年は俺が貰ってくがな」

そう言って俺は転移した

～ジャックサイド～

ん？あれ？俺どうしちまったんだっけ？・・・ああ、そうか俺あいつに負けたんだった、俺もまだまだだな。けど、いつか絶対勝ってやるぜ！

しかし、ここどこだ？目開けるか

「って、なんで手前がいるんだ！」

「何故って決まってるだろ俺がお前を買ったんだよ」

「何でそんなことしたんだって聞いてんだよ！」

「ふむ、そう聞かれるとね。んー、そうだな君が強くなりそうだったから、そして俺の弟子にしたかったからかな？という訳で大丈夫？そして弟子になる？」

すげー無茶苦茶な奴だけど実際強かったし、何より俺の勘が告げてるこいつについてけばさらに強くなれるって。だから俺は

「俺をあんたの弟子にしてくれ！」

生まれて初めて頭をさげて頼んだ

～サイドエンド～

ジャックがこんなに熱心に頼むとは思わなかったぜ、だがこんなに頼まれちゃ断れないな、それにもともとそのつもりだったからな

「ああ、無論そのつもりだ、だが半年だけだ半年だけでお前を最強クラスにしてやる！

そして、俺に一撃入れてみろ！」

第2話「初めての原作キャラ」（後書き）

めんどかったんで省略しちゃいました、次も省略するかもしれません

第3話「サブタイとか考えるのって以外と難いよね」

ジャックを鍛え始めて半年、時間が飛んでるが決して作者が面倒だったわけじゃないぞ？
さて、話が脱線したが修行内容はずっと重力室で過ごす。（いちよう重力は2倍3倍と一倍ずつあげてった。最終的に１０倍まで行った。ちなみに俺は４００倍まで耐えられる。無論、嘘だが）それだけだ

「さて、短い間だったがよくがんばったな」
「ああ、これまであんがとなゼロ」
「次合う時にはもうちょっと強くなってろよ、それとこれは餞別だ」
そういって俺はアクセサリーを渡した。
「なんだ、アクセサリーか・・・」
ラカンはもっといい物が、貰えると思ってた様なので落胆してたが
「失礼な、それは売れば結構いいものになるんだぜ」
ジャックといったら金目のものだろ、だから良いものをやっといた
「じゃあな、縁があったらまた会おう」
そう言って俺は転移した
～魔法世界のどこか～

しかし、次はどうしようか、もうちょっとラカンを鍛えればよかったかな？
・・・ナギを鍛えるとしようかな？よしそうと決まったらすぐ行こう！

～移動中～

という事でやってきましたウェールズです。さてナギを探そうか
・
・
・
・
・
『こりゃーーー！ナギーーーー！』

ん？何か聞こえたな？校長がナギを叱ってんのか？
聞こえた方を見てみると子供が走ってどっか行くのが見えた
たぶんあれがナギだろう、追いかけてみるか

～ナギサイド～

俺の名前はナギ、今は校長から逃げてる所だなんで追われてるかっていうと、悪戯を仕掛けたんだがそれが思いのほかうまくいって・・・くっくっくくやべぇ、思い出したら笑いがこみあげてきやがったそれで逃げてんだが、捕まると説教だから俺だけが知っている場所に行った

「あ～、面白かった次はどんな事をしようかな～」
「ほう、何が面白かったんだ？少年？」

～サイドアウト～

「ほう、何が面白かったんだ？少年？」
「誰だてめぇ！ここは俺しか知らないはずだぞ！」
「誰だと聞かれても俺はしがないただの旅人としか答えられんが。で歩いてたら君が走ってたから追いかけてみた。という事だが何か分からない事でもあるか？」
「なんで追いかけてくんだよ」
「その事か、それは今の時間は君くらいの子は学校だからな気にもなるさ。あの怒鳴り声からすると怒られるから逃亡中ってとこかな」
「うっ！」
「図星か、何で悪戯なんかするんだ？」

だいたい分かるけど

「バカにされたんだよ、『この魔法量だけのバカが！』ってな、むかつくだろ？だからやり返しただけだ」
「やり返すなら魔法でやり返せよ、っていくら魔法量が多くても先生に勝つには経験が足りないか・・・。よし、決めたお前に魔法を教えてやる」
「げ。いや、いいよめんどいし、魔法覚えるのもめんどいし」
「そういうな、それにそれほどの魔力なら無詠唱で唱えられるさ。今から放つから見ておけよ」

『魔法の矢　雷の1矢　光の1矢』

「なんでー、魔法の矢じゃねえか、それくらい俺にも出来らー」
「いやいや、これからがちょっと違うんだ」

俺はそう言って雷の1矢と光の1矢に魔力をこめる

『進化魔法　雷の槍　光の槍』

「おお」

「まだ終わりじゃねえぜ」

びっくりしているナギに向かってそう言う

『合成魔法　雷光一閃槍』

「お前、魔法障壁を空に全力で展開しろ」

「あ、ああ、これでいいか？」

そう言ってナギは魔法障壁をはる

（なかなか硬そうだが見せかけだけだな、かんじんの強度がない、それでも普通の障壁よりは硬いが）

「じゃあ、よく見てろよ、オラッ！」

俺の投げた槍は簡単に障壁を砕いて空に消えてった

「まあ、こんなもんかな」

「すっげー！どうやってやんだ？教えてくれよ！」

「教えてやるから離れてくれ、まず魔法の矢を発動してだな」

ナギに魔法を教えてやった

「いろいろと教えてくれてありがとうな、え～っと」

「そういや名前教えてなかったな、俺の名前は・・・あ～とゼロだ。お前は？」

「俺はナギだ！あんがとなゼロ。ゼロこれからどっか行くのか？」

「いや、暫くはここで観光でもしてるさ。ここに家を建てるから暇になったら来いよ」
「へ？建てるってどうやって？」
「それは秘密だ。てか、お前まだ学校の時間だろ、学生は学生らしく学校行って来い」
「へーい、じゃまた明日」
「ああ、じゃあな」
・
・
・
「行ったか、さて家を作るとしますか」
穴ほってと
「完成っと」
さて、またナギが来るまで寝てるか

第3話「サブタイとか考えるのって以外と難いよね」（後書き）

進化魔法　雷の槍　光の槍
解説　魔法の矢　雷の1矢　光の1矢に必要以上の魔力を注いだオリジナル魔法。ちなみに属性の数だけある。
形　槍
威力　使用魔力によって違う
消費魔力　使用者の任意で消費量を変えられる
備考　術者以外が触ると、その属性にあった状態異常がおこる。
例　雷＝感電　氷＝触った箇所が凍る

合成魔法　雷光一閃槍　読みは、らいこういっせんそう
雷の槍　光の槍を合成した魔法、結構繊細な魔力コントロールが必要（メドローア程ではないが）ナギには出来なくもないが戦闘中にやると一瞬隙が出来てしまう。
ゼクトやアルなら普通に出来る。
形　槍
威力　消費魔力によって違う
消費魔力　任意で消費できる量が決まる
備考　これ以外の組み合わせもあるがこれの難易度は下の上一番簡単な組み合わせは火と風

やってしまった、だが後悔はしていない！！

第４話「反逆者になっちまった」

俺がウェールズに来てから数ヶ月がたったある日の事

「おーい、ゼロー」

「ん？どうしたナギ、またサボったのか？」

「あー、いやそうじゃなくてな、学校退学になった」

あー、もうそんな頃だったか

「へー、でお前はこれからどうすんだ？」

「俺はこれから旅に出ようと思ってるんだけど・・・ゼロも来ないか？」

「別にいいが、ちょっと待ってろ準備してくる」

断る理由もないしな

「ホントか！じゃあ早速行こうぜ！」

「そうせかすな、１０分位待ってろ、準備してくる」

～数ヵ月後～

あれから数ヵ月後・・・え？なんでそんなに時間が飛んでるかって？気にするな！

とりあえず、この数ヶ月に起こった事はアル、詠春、ゼクトが仲間になった。（全員にバグキャラ認定された）

今はぶっちゃけラカンが仲間になるあたりだ。で、今はみんなで鍋パーティーをやっている

「ナギ。おまっ、何肉を先に入れてるんだよ！」

「いいじゃねぇか。旨いもんから先でよ」
「いやダメだ、野菜の出汁がまだ染み出してないから、もうちょっと我慢しろ」

と言いつつ、俺も肉を食ってる

「おい！自分だけズリーじゃねえか！俺も食う！」
「トカゲ肉でも旨いのかのう？」
「フフ……詠春、零、知っていますよ。日本では貴方のような者を『鍋将軍』と呼び習わすそうですね」

ついでに『零』っての俺の名前ね、フルネームは『神羅　零』何とも厨2くさいが、旅に出るとき名前決めたんだ。みんなに何で偽名？と聞かれたから家族に手をだされたくないからって答えたらそうかって帰ってきた。まあ、家族なんていないけど

「ナベ・ショーグン！？」

ナギとゼクトの後ろに雷が見える。いや、比喩じゃなくてマジで、いつの間にかナギが雷系統の魔法を放ってた。随分魔法の使い方が上手くなってきたな

「つ、強そうじゃな」
「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」
「違うぞ、ナギ」
「何がだ？」
「食わしてやりたいじゃなくて、食わせてやる！だろ？」
「ああ・・・そうだな、そのためにさっさと戦争終わらすか！」
「じゃ、まずは食事で英気を養おう」

という事で食事を再開。と、思ったらなんか剣が飛んできた。
飛び散ってしまった鍋の中身は、全て鍋でキャッチした

「ナイス！零」

親指立ててこっち見てるナギ。そんな事いいから敵探せよと言いたい

「食事中失礼～ッ。俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」
「で、どうするよ？ナギやるか？」
「おうよ！勿論！てめーら、手出すなよ！」
「では、私たちはどうしましょうか？」
「飯でも食ってようぜ」

～13時間後～
やっと、終わったか。全然終わらないから気が抜けなかったぜ・・・
ちょいと寝不足だぜ
で、あれから数日たってジャックが仲間になった

そしてまた更に数ヶ月たって、グレートブリッジ戦。そしてついに
二つ名が出来た！
その名はとか『ナナシ』『ゼロ』や『人形使い』『死神』『なに！
？あの人？人間じゃねえだろ！強すぎるだろ！』等
『ナナシ』は本名を名乗ってないからか
『ゼロ』はあれじゃね？名前に『零』ってつくからゼロなのかもな？
『人形使い』は・・・まあ大量の人形使ったんだよ。人形にスタン
ロッド持たして殺さないようにしてな
『死神』は黒いローブかぶって武器が大鎌だからかな？
最後、二つ名じゃなくて感想だろ！
あとはガトウとタカミチも仲間になった。ガトウには足技を、タカ

ミチにはいろんな技を気功波や魔閃光、２つを合わせた咸卦砲（誤字にあらず）を教えたら喜ばれた。
今はガトウに呼ばれて本国首都に来てる、協力者に会って欲しいからだそうだ。
「で？　協力者って誰よ？」
質問すると実にいいタイミングで一人の男が近づいてきた。
「マクギル元老院議員！」
「いや、主賓はあちらのお方だ」
そこに登場したのは、ウェスペルタティア王国アリカ王女。
綺麗なんだが絶対結ばれない運命だと分かると下心がなくなるな。
ジャックが話しかけているが、「気安く話しかけるな下郎」と一刀両断。
ナギのヤツは見惚れてるし。
話し合いの内容は要約すると戦争を終わらせたいから力を貸してくれって感じだ。
その後ナギは見惚れてたことをネタにされジャックに弄られている。
そしてようやく『完全なる世界』の存在が明るみになり、俺達は休暇中『完全なる世界』についての独自の内定を開始。
そして調査中ナギがアリカ王女と一緒に敵本拠地を壊滅させたおかげで証拠を手に入れた。
で、現在。俺、ナギ、ジャック、ガトウの面々で執政官の弾劾手続きをするためにマクギル元老院議員と法務官に会いに来ている。
「法務官はまだいらっしゃいませんか」

しかし、法務官が未だに現れない。というか呼んでないだろ。フェイト？

「法務官は……来られぬことになった」

「ハ……？」

「……あれから少し考えたのだがね、せっかくの勝ち戦だ。ここにきて……慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね」

「ハァ」

「私の意見ではない。そう考える者も多いということだ。時期が悪い。時を待つのだ。今回は手を引いてだな……」

「待ちな。あんたマクギル議員じゃねぇな。何もんだ？」

そう言ってナギが火を放った

「ちょっ！？　ナギおまっ……元老院議員の頭いきなり燃やして……」

「バーカ。よく見てみなおっさん」

「そうだぜガトウ。こいつは偽者だ」

「何っ！……」

炎の中から出てきたのはマクギル議員に変装したフェイトだと思われる幼j…少女だった

「……よくわかったね。千の呪文の男、人形使い。こんな簡単に分かるとは思わなかったよ」

「残念だったね、本物のマクギル元老院は残念ながら既にメガロ湾の底だよ」

「てめぇっ！」

そう言ってナギは突っ込んで行ったが、男2人に防がれた

「強ぇぞやつら！」

「ハッハ。だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負できない敵に比べりゃ、万倍！！　戦いやすいぜッ！！」

そう言って攻撃しようとしたが

「わしだ！　マクギル議員だ。スプリングフィールド、ナナシ、ラカン、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！　奴らの仲間もだ！　今も狙われている。軍に連絡をッ……」

「げ」

「やられたな」

「君たちは少しやりすぎたよ。悪いが退場してもらおう」

ナギとジャックとで飛び掛ったが、逃げられてしまい、俺たちは反逆者として首都、連合を追われる事となった

第４話「反逆者になっちまった」（後書き）

いやー、最近やる気が出なくて遅ちゃいました。楽しみにしてた方（いないと思いますけど）には申し訳ありませんでした

第5話「うん、調子に乗って死んじゃった。テヘ☆」

あれからなんやかんやあって、お姫様が捕まってなんやかんやで助けてなんやかんやで紅き翼の秘密基地に行っています

「ついたぜ、ここが紅き翼の秘密基地だ」
「何だ、これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！　どんな所かと思えば、掘立小屋ではないか！」

おいおい、いきなりダメだしかよ

「俺ら逃亡者に何期待してんだこのジャリはよ」
「言ってやるなラカン、こいつはまだ頭の弱いガキなんだから」

そう言って哀れみの目で見てやる

「そんな目で見るのはやめるのじゃー！というか、貴様ら無礼であろう」
「へっへーん、生憎ヘラスの皇族にゃ貸しはあっても借りはないんでな」
「俺は貸しも借りもないがな」
「なにぃ？貴様ら何者じゃ！」

誰だ誰かと聞かれたら答えてあげるのがｒｙ
まあ冗談は置いといて

「俺か？俺は世界最強の傭兵ジャック・ラカン様だ！」
「俺は神羅零だ。勿論偽名だから覚えなくていいぞ」
「なにー！貴様らが『千の刃の男』と『死神』なのか！」

うん、まあ普通は驚くよね、こんなバカっぽいのが巷で有名な『千の刃の男』なんだから
っと、こんなことやってる間に向こうの方終わったみたいだな

「それで、ナギどうする。アリカ姫に協力するか？」
「そんなもの決まってるだろ。
俺の杖と翼、アリカ姫あんたに預けよう」

―それから映画なら3部作、単行本なら１４巻分くらいの６ヶ月の死闘後―
ラストダンジョン手前にいます

「不気味なくらい静かだな奴ら
「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」
「神頼みでもしてんじゃね？『おお、我等が神よ！勝たせたまえ』みてーな」

それ最高と言って笑い合う

「ナギ殿！帝国・連合アリアドネー混成部隊準備完了しました」
「おう、あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺たちが本丸に突入できる。頼んだぜ」
「ハッ！それでナギ殿と零殿」
「ん？」「俺も？」
「サ、サ、サインをお願いできないでしょうか」
「ああ？いいぜ、それくらい。零もいいよな」
「ああ、いいんだが」

俺サインとか書いた事ないんだが。まあ、それっぽくやればいいか

「ほれ、これでいいだろ」
「あ、ありがとうございます。一生大事にします」
ｐｉｐｉｐｉお、ガトウから念話が
「悪いが連合の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせる事は出来ないか？」
「無理ですね、私たちでやるしかないでしょう」
「既にタイムリミットだ」
「ああ、それに敵さんもいつになくやる気みたいだぜ。ほら見てみろ悪魔の中に2体ほど強い奴がいる。
って事であいつ等を倒してからそっちいくから。ところでナギ、一番槍は俺が務めていいか？」
「ああ、いいぜでかいのを頼む」
ナギに期待させちまったしいっちょやるか
『死よ、我らが旅事の終着点よ、彼等に旅の最期を迎えさせたまえ』
『ＤＥＡＴＨ』
詠唱し終わったと同時に巨大なレーザーが奴らを消し去った
ふむ、１０分の1くらいは減ったか兵士の仕事を取るのは嫌だから手加減したが
「すげーじゃねえか零！何でこんなの隠してたんだよ！」
「隠してたと言うかただ単に使えなかったんだよ。詠唱に時間かかるし。ま、この話は後でするとしよう」
この詠唱に時間がかかるのは、言葉一つ一つに魔力をのせなきゃい

けないからな。それに集中を乱すと俺が死ぬし

「まあ、後で話してくれるならいいけどよ。じゃあ、野郎共行くぜ！！」

「あ、悪いけど俺にはお客さんが来てるから遅れるわ」

「え、ちょっとおい！待てよ！」と聞こえるが、ナギの声を無視し、ナギ達は夜の迷宮に、俺は2体の悪魔の元へと行く

「どうもこんにちは、俺の名前は神羅零。まずはあんたらの名前と目的を聞かせてくれないか？」

「フム、こんにちはと言うには早い気がするが・・・まあいいだろう私たちは悪魔サタンと」

「ルシフェルと言う。私たちに任された事は貴様を殺す事だ」

ふーん、俺を殺すねー。てかサタンとルシフェルってハルマゲドンでも起こすつもりかよ」

「何を言っているのだ？」

「ああ、声に出てたか気にするな。んじゃま、早速殺しあうとしますか」

その一言で戦闘が開始した

「まずは小手調べに」

『灼熱の火球に飲まれろ！』

『炎の牢獄』

その言葉を言った瞬間、人一人など簡単に飲み込めるほどの巨大な炎が現れた、が

「悪魔拳圧！」
ただの拳圧のみで消されてしまったその事に驚いていると
「まだ、終わらんぞ悪魔キーック！！」
「悪魔パーンチ！！」
「しまっ」
サタンとルシフェルの攻撃がモロに入ってしまった
「痛ー、あー油断した、やっぱりどんな時でも油断しちゃダメだね。だから本気でやろう」
その瞬間殺気やらなにやら倍増した。え、適当すぎないか？いいんだよもう作者投げやりな感じでやってるし
じゃあいきますか、昔思いついた技！『雨霰』
この技は自分の拳圧を四方八方に飛ばす技だが今回は目の前の2体に向けて放つ
「ぬう」
「これはなかなか」
結構本気なのにあんまりやばそうに見えないな
「やるな、小僧」
「我等も本気を出してやろう、感謝しろよ」
ルシフェルの方はどうも高圧的だな

「じゃあ、こっちも限界ギリギリで行こう」

「「「じゃあ、行くぜ！」」」

やべ、勝てたはいいが左右の腕なくしちまった、なんかいい方法ないかな

・・・食えば生えるかな？とりあえず食ってみよう・・・

おわ！生えた！！きも！俺の体キモ！

・　・

・

・
だめだ、左のほうは完全に燃え尽きてた、あとでなんかつけるか。
あ、足りない分はほかの悪魔で補えばいいか！
えーっと、悪魔悪魔お、いたいた。じゃ、いただきます
よし、これでよし。じゃ、とっととナギの所に行くか
・
・
・
お、いたいた。って！黒い奴がナギを狙ってやがる！
「ナギ！どけーーー！！！グッ！！」
体当たりでナギを退かしたが、俺が喰らっちまった。
「「「「「零！」」」」」
「ん、大丈夫だ、問題ない。しいて言うなら、油断してるときに足の小指をタンスの角にぶつけた感じだから」
軽口を言って問題ないことをアピールしとく
本当はメッチャ痛いけど
「一体誰が！？」
やべえ、また攻撃してきやがった！
「いかんッ」
『最強防護！！』
「うらぁ！！消し飛べ！！」
俺のとった行動は、突っ込んでこの魔法を消そうとしたが無理だった

結果は俺の体がほぼ消されただけだった。
それ以降のことは覚えてない、というか、俺は死んでしまった。まあ、何年かすれば復活するが、今はもう眠ろう。

「最後に言っとくナギ、絶対奴に勝てよ」

聞こえたか分からないがたぶん聞こえただろう。ほかに言う事はないよな？うんダイジョブだ。
今・・・は・・・ゆっ・・くり・・・・寝よう

―な　聖　求　か―

あん？なんか言ったか

―汝　杯　る　―

だから何言ってんだよ！

―汝聖杯を求めるか―

聖杯？んなもんいらねえよ

ただ俺はダチとバカやって酒飲みたいだけだ

―その願いかなえよう―

そうか、んじゃ出来るならかなえて見せてくれよ

―了解した、汝の願いを聞き入れた。汝を地上へと送るそれでいいな―

ああ、それでいいよ。勝手にしてくれ

そう言ったと同時にあたりは光り、そして俺は

「て、め、俺マ、ター、か？」

あれ？言葉がうまく出ない。あれ？意識が、ま、くろに

お、かし、な。ああああああああ■■■■■■■■■■■■■■■■

「■■」

第5話「うん、調子に乗って死んじゃった。テヘ☆」（後書き）

最後、どこにいるか、

第６話「さようなら、Ｆａｅｔの世界ただいま、魔法世界」（前書き）

今回短くてサーセン

第6話「さようなら、Ｆａｅｔの世界ただいま、魔法世界」

ふ、ふふふ、やっと、やっとやっとやっとやっとだ
ついについにについに戻ってきた

「魔法世界よッ！！！私は帰ってきたあああぁぁぁ！！！」

ライフメーカーに消されたあと、どうなったかというと

目が覚めたらなんかＦａｅｔの世界に行ってた！しかもクラスバーサーカーで零崎の状態で第３次聖杯戦争中っていうね
え？お前全然零崎じゃないだろだって？今から何百年か前に目覚めてたんだよ。それでついうっかりで殺しちゃうのはまずいから、零崎と普通の人格を分けてたというか、それぞれ別の魂にした感じかな？だから俺は零崎であって、零崎でないとも言えるんだよ。
おっと話がずれたね、とりあえず自分が何をしたか思い出してみるか

・俺はバーサーカーとして召喚されて名前も宝具もこれといってないことにマスターは絶望してたが、能力面がありえないほど高くて、それに喜んだマスターが調子乗ってアヴェンジャーやセイバーを連続して倒したが故にほかのマスターが徒党を組んで俺は倒されたと
・アヴェンジャーの血を飲んでしまったからか、俺は悪へと染まったようだその証拠に黒い刺青が体中にある
・何か足に違和感が・・・セイバーの足を食ったか
・満月の夜、背中に羽が２本、体に霧がまとわりつき、肌が黒くなり・・・さらに刺青まで！
何か内包する魂が５個増えてんだが・・・なんですか？俺達はいつもお前の傍でってか！？そのおかげか性格がちょっと変わったんだよ。というかちょこちょこ変わる

・宝具を手に入れたみたいだな

とまあ、こんな感じだな。さて、まずはアルの所にでも行ってみるか

・

・

・

「よっ！みんな、元気してたか？」

「「「「「零（さん）！！！！！」」」」」

おー、みんな驚いてるな。まあ、死んだと思われてるだろうし

「なーんか心気臭ーんだが。どーした？」

「それはですね」

・

・

アルから説明を受けた

・

・

「なるほどねー、姫さんが犯罪者にされちまって、それをナギが助けようか助けまいか考えてると。そういう事だよな？」

「はい、噛み砕いて言えばそうなりますね」

めんどいなー、いっそのこと魔王式Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩでもしようかな・・・おや、噂の人がやってきたのかな？

「さっきからうっせーなー、誰か来た・・・って零じゃねえか！死んだんじゃなかったのか！」

人を勝手に殺すな！と言いたいけど、実際死んだからな、んなこと言えねえや

「御覧のとうり、ちゃんとは足ついてるぜ。
それよりナギ、助けなくていいのか？」
俺がそう言うとナギは俯いてしまった
「なあ零、正義って一体なんなんだ？」
「正義ねー、お前の口からそんな事を聞くだなんて、夢にも思わなかったぜ。
まあ、俺が思うに正義なんてないと思うぜ。
俺らだって英雄とか言われてるけど、人殺しには変わりないだろ？
だから、細かいことはどーでもいいんだ。お前は自分の信じた道を行け！我を通せ！」
「そうか、そうだよな。細かい事を考えすぎたんだよ、コンチクショー。
ありがとな零、おかげで道が見えた」
「そうか、それは何より。じゃ、先に行ってるわ」
〜10日ヶ後アリカ姫死刑執行日〜
おーいるいる魔獣たちが、うじゃうじゃいやがる。
でも、だめだぜー俺のダチのため、ここで手前ら皆殺しにしてやるから
さて、それでは
「零崎を始めよう」
・・・・・・

・
・
ん？おお、もう終わってたか、熱中してて気づかなかったぜ
えーっとナギ達は・・・いたいた杖の上でキスしてやがる。
ふむ、絵になってやがるし。・・・写真とっといて、後でからかってやろう

第6話「さようなら、Ｆａｅｔの世界ただいま、魔法世界」（後書き）

実は作者、Ｆａｅｔは2次創作くらいでしか知らないのでいっそのことオリジナルにしました

宝具『落ち続けるもの』
ランク：？
種別：？
レンジ：？
最大補足：？
形状は自由、体にあるイレズミが集まって出来たもの
効果：過去・現在・未来のマイナスの思いに比例して威力を上げる

宝具？『零崎モード』
ランク：Ｆ
種別：？
レンジ：
最大補足：１人
殺し、殺し、殺し続けてたらいつの間にか零崎になってた。何時からって？俺が知るか！
効果：何も考えずに行動するから、肉体のリミッターが外れ、精神干渉の攻撃も効かなくなる

『十二（ゴッド・ハンド）の試練』
ググレば分かる

第7話「原作まで秒読み段階」

さて、俺たちは現在京都にきてまーす
ナギとラカンと姫さん達は、始めての京都にはしゃいで
ガトウ、タカミチ、詠春はそれを止めて
アルと俺はそれをニヤニヤしながら見ている

こんな感じで観光は順調だったが、書いたり説明したりするのがダルイのでキングクリムゾン！！

そして今はスクナフルボッコを肴に酒を飲んでいる
え？お前は殺らないのかだって？面倒だしだるい。だからやんない

～翌日～

「もう・・・来ないで・・・・く・・・れ・・・」

という言葉と共に詠春は倒れた
流石に可哀想だったので、励ましの言葉と胃薬を渡しておいた

そしてまたキングクリムゾン！！

～数年後～

あれから数年たったが、その間俺は『何でも屋』をやっていた
始めは客は来なかったが、傭兵をやってる内に依頼が増えてきた

世界各地で戦闘技術を教えたり・・・

とある場所に潜入したり・・・
ある人物の最後を見届ける任務もあったな・・・
あ！旧世界の仕事では魔法は使ってないよ、だって使うとつまんないじゃん？
ま、色々してたわけさ。で、今はマホラって所から『教師をしてくれないか？』という依頼が来たわけさ
そんで今学園長室に向かってるんだが、なんで女子中学校なんかにあんだよ？さっきから視線が痛い・・・

そんな肩身の狭い思いをした道中はカットして、学園長室に入る

コンコン
「失礼しまー・・・す？」

最後が疑問形になったのはしょうがない、だってあれだよ？
知識としては、学園長がぬらりひょんだって知ってたけど。
実際に見ると・・・ねえ？

「フォ、フォ、フォ、君が魔法世界の英雄、神羅零殿か」

「！」

このじじいなんで知っている？強力な認識阻害を張ってたはずだし、
姿も変わってる。
魔法世界の依頼でも、認識阻害を使ってたはずだが・・・

「神羅零は死んだ、今の俺は四季崎零だ。
だが、なんで俺のことを知っている？」

少し殺気を込めて聞いた

「フォ！？そ、その殺気はやめてくれんかの？
わしは隣にいる高畑君に聞いたんじゃよ」

そう言われて隣にいる男に視線を向ける

「お久しぶりです、零さん」

ああ！思い出したタカミチだ！確かにタカミチだ！そういえばここにタカミチがいたのをすっかり忘れてた

「久しぶりだな～、タカミチ」

それからしばらくお互いの近況報告をした

「それで、ぬ・・・じゃなかった、学園長さんよ、どんな依頼で俺をここに呼んだ？」

「うむ、それなんじゃがな」

仕事の説明をきいた

「で、受けてくれるかね？」

仕事の内容は、ここの教師、広域指導、夜の警備、女子寮の管理らしい。

ここの教師ってのは恐らく、数年後にやってくる未来の英雄候補、ネギ・スプリングフィールドの補佐のためだろ。
この時からネギの未来は決まってたのかな？
後はついでにやってくれたらうれしいな～。ってとこかな？

「受けてもいいが、条件がある」

「ふむ、なんじゃね？」

「まあ、そんな難しい事じゃないさ
1つ　夜の警備で英雄として紹介するな
2つ　俺を英雄と知っていいのはここにいる奴ら、つまりあんたとタカミチのみ。それ以外に俺の正体を教えるな
3つ　追加の仕事が出来た場合は、受けるか、受けないかを俺に決めさせろ
4つ　何でも屋としての仕事は続けさせろよ。休業なんかしたら信用がた落ちだからな
5つ　タカミチ、お前俺に対して敬語を使うな。オーケー？」

「わかった、その条件を呑もう。高畑君も敬語をつかわなように」

こうして俺の教師生活＋αが始まった

第7話「原作まで秒読み段階」（後書き）

所で皆さん。気が早いきがしますが、ヒロインは誰にしましょうか？
今の所は、のどか、このか、さよ、茶々丸とかいいなー。と思って
います

第8話「原作開始・・・とでも思ったか！残念だったな！今回はフラグ建築の旅

ある日の休日のお昼過ぎの事、俺に一本の電話がかかってきた

『久しぶりだな、ミスト』

こいつの名前はスネーク、前に言ったある人物の最後を見る任務中に出会い、それから良くつるんでる。
しかも、表の人間にしては中々の・・・というか最高峰の人間だ
ちなみに、ミストというのは俺のコードネームだ。暗殺任務を主に受け、証拠もないから『まるで霧のようだ！』と思われたらいいな～。という思いをこめて名乗っている。

「で、何のようだスネーク？
もしかして、またダンボール自慢か？
それともまた新しい携帯食品でも作ったか？」

『いや違う、というかそこだけ聞くと俺がダンボール好きで食品会社の社長みたいだな』

いや、お前らマジで食品会社になったほうがいいと思うぞ。ボンカレーとかまだ日本でも作れてないぞ。麻帆良は別だけど
え、なんだって？時系列がおかしい？気にするなよ。

『実はな、ミラーに聞いたんだが日本にはＳＡＭＵＲＡＩと言う者がいると聞いたんだが。
何か知らないか？』

ミラーのことだからきっと変な風に侍の事を吹き込んだかもしれな

いから一様聞いとくか

「スネーク、それって銃弾を弾いたり、鉄を切り裂いたり、遠くのもの切ったりするあれか？」

『そう！それだ！やはり実在してたのか！』

いやいや、夢を破壊するような事思っちゃ悪いけど、そんな事人間に出来るわけが・・・

あったな、というか普通にやれそうだわ。

「ああ、いるな。確かに実在する。

で、そんな事を聞くために電話をしてきたのか？」

『いや、そうじゃないんだ。

その事を皆に聞いたら実在する派と実在しない派に分かれてしまったんでな。

それで日本の事にならお前に聞いてみればいいんじゃないか？という結論が出てな』

「なるほど、だが証拠がないと『そんなの嘘だ！』という輩が出てくるかもしれないぞ？」

『確かにそうだな、だがどうすればいいんだ？』

「そこでだ、京都に行こうぜ」

という訳で京都に来ました

「で、どこにいるんだ？そのＳＡＭＵＲＡＩは」

「落ち着け、ジョン。まだ先だ」

子供みたいに目の色を変えてキョロキョロしているジョンを、どっかいかないように見張りながら詠春の所え連れて行く

ん？ジョンって誰だって？スネークの事だよ。こいつは結構有名だからな、偽名とか使わなくちゃいけないんだよ

「ついたぞ、ここがそうだ」

「ここか！ここがそうなのか！ＳＡＭＵＲＡＩはどこだ！」

「少しは落ち着け、すぐ来るから・・・と、きたきた」

「すみません、少し遅れてしまったようですね」

その言葉と共に若干やつれて顔に似合わなくもない敬語を使う中年、ていうか詠春が現れた

「詠春、その言葉使いはアルみたいできもいぞ」

「すみませんね、西の長という立場上このような言葉をしなくてはならないのですよ

ところで今日は何の用ですか？」

「あれ、言ってなかったっけ？

まあ、いいやこいつに神鳴流で鉄切ったり、いろいろ見せてやってくれ」

「だ、だめですよ。そんな事をしたら
それにこの人裏の住人じゃないでしょう」

「大丈夫だ、問題ない。ＳＡＭＵＲＡＩを信じてるから」

俺の言った理由に不満があるらしく、ぶつぶつ言ってたが最終的には折れてくれた
そして今は『気』使用禁止の木刀ｖｓ素手（ＣＱＣ）でバトルしている
どうやらストレスが溜まってるせいか気合がはいってるな
で、俺は詠春の娘の木乃香ちゃんとその護衛の刹那の相手をしているつっても喋ってるだけなんだがな

～数時間後～

「じゃ、詠春またな～」

「はい、また今度」

『お兄ちゃん、またな～』

「またな、お嬢ちゃん達」

お嬢ちゃんに挨拶してと、ジョン達は握手をしているな…何故？

～数ヶ月後～

詠春から電話がかかってきた、内容は

「木乃香が『うち将来あのお兄ちゃんのお嫁さんになるや！』とか言ってるんですが何か知りませんかね（怒）」

・・・どうしてこうなった、この前溺れてるところを助けたからか？しばらくあっちにいかないことにしよう、殺されたくないし

第8話「原作開始・・・とでも思ったか！残念だったな！今回はフラグ建築の旅

ちなみに、スネークを紹介したときは溺れていませんよ。
描写してませんがスネークを詠春に紹介した後に何回か、学園長の遣いとして主人公がこちらに来てます。その時に術師の一人が「今、怪我させれば奴らのせいになるんじゃね？」と考えて溺れさせました

第9話「残念！まだ原作には入らない！」

あれから幾年の月が過ぎ去った・・・とは言っても数年くらいだがなとりあえずここ数年に起きたことでも話そうか

・『アンリ・マユ』の血を飲んだ時にできた刺青を影の魔法の応用で動かせるようになった。とはいっても普通の影のように遠くまで伸ばせないがな。ていうか今更なんだがなんで血を飲んだだけで、刺青が移るんだ？呪いのたぐいか？だが、そうなると…ハッ、いかんいかん。まあ、この話はここで終わりと

・スネーク達が怪物の住む島を見っけたらしい、リオレウスとかティガとかギアやら、他にも何体かいたから自作の別荘に放り込んでおいた

・満月の夜には体にひっつけたサタン、ルシファー、アスモデウス達が表に出てくる、恐らく月の魔力のせいだろう。

・最近原作を忘れかけ始めてる。例えば名前とかは覚えているが流れが思い出せないって具合にな

あとは色々あったりなかったり、まあその辺は後々な、そろそろ始まるから。え？何が始まるかって？それは見てからのお楽しみてのは冗談で、答えはあの主人公のためだけに集められたあのクラスを受け持つことになっただけだよ。
俺が担任、タカミチが副担任ってな。めんどくさい事このうえないよ、まったく

ま、依頼だからしょうがないんだけどさ

と、若干あの時依頼を受けたことを後悔しながらドアを開けようとしたとき、手が止まった
なん・・・だと？

「どうかしたのかい零？」

いきなり止まった俺を見てどうかしたかと思ったのか、タカミチが話しかけてきた

「いやな、このトラップをどうすればいいかと思って」

そう言って黒板消しと他にもあるトラップを指を差す

「いや、回避すればいいんじゃないかな？」

タカミチはそう言うが、甘い！甘すぎる！こういうのに引っかかってやればノリのいい先生とみられるが、冷静に対処すると感じ悪い先生とみられちまうんだぞ！
という訳で

「よし、タカミチ行ってこい」
「嫌だよ、なんでいかなきゃいけないのさ」

ち、反論してきやがった。しゃーねーな

「しょうがない、タカミチ、ジャンケンだ負けたほうが行こう」

「・・・分かった」

どうやっても断れないと感じたのか潔く乗ってきた

「んじゃいくぞ、ジャンケン」

「「ホイ」」

・

・

・

負けたｏｒｚ

「負けたもんはしょうがねえ、行ってくる」

「頑張ってきなよ」

ちくしょう！あの時パーを出しとけば

「はい、お前等初めまし、って！！」

黒板消しは、扉をあけた瞬間に落ちてくるから当たるわけもなく（というか、どうやったら当たるんだ？）スルーしたが、すぐに矢が飛んできたので回避する。

そして回避したところに金ダライ、だが指でもって投げる、そして前方にローションの入ったバケツが落ちてきて、滑って歩きにくくなる。

最後にまた矢が飛んできたが、左右に回避できないようなのでマトリックス！！やった！と思いきや足元はローションまみれ！これでは体制を立て直すときに転んでしまう！

だが最後に床に手をつきブリッジでセーフ

『おおおおお』

パチパチと拍手が聞こえてくる。だがこの体制を維持するのきついので足に力をいれ倒立をして元の体制に戻る

「えー、本日からお前らの担任になる四季崎　零だ以後よろしく。それと、タカミチ入ってこい」

「同じく、今日から君たちの副担任をやる高畑・T・タカミチだ、よろしくね」

高畑せんせ～、とか担任地味～とか聞こえるな

「え～これより出席を取る質問とかは授業中とかで聞いてくれ。じゃ、タカミチあとは任せた」

『え！ちょ、おま』とか聞こえるが気にしない、さあタカミチ生徒との親睦を深めるのだ！べ、別にめんどくさいわけじゃないんだからね・・・自分でやっててなんだが、きめぇな（笑）

・
・
・

で、俺の授業

「はい、まずは質問ターイム、いちいち相手指すのはめんどいから誰かひとり出てこい」

「あ、じゃあ私が。えーっと年は？」

「秘密、でもタカミチより上」

「えー、じゃあどこ出身ですか？」

俺の答えに不満だったのだろうがめげずに次の質問を聞く、うん強い子だ

「さあ、どこだろう？俺の親は医者だったからな親に連れてかれて戦場やらどっかの国やら連れてかれたからな。あえて言うとすれば日本かな？」

これは半分嘘で半分ホント、生前の幼少期は戦場で育ったらしい。らしいってのはあんまし記憶にないからだ

「あ、えっと、すいません」

「気にしなくていいさ」

「あ、はい。じゃあ次は好きなものと嫌いな物を」

「好きなもの？は暇な時間と遊び、嫌いなものは仕事だ」

「特技は？」

「作ることと改造、あと変装」

「その帽子は？」

「俺のトレードマークみたいなもんだ気にするな」

質問にあったように俺は帽子をかぶって、色を黒に染めている。な

ぜかって?目立ちたくないのさ・・・もちろん嘘だけど。てか、そんなふうにしないと目立つんだよ。だって白髪の長髪で赤目だよ?目立ちすぎるだろ!ちなみに髪を伸ばしている、長ったらしいので普段は帽子の中に入れてある。だから見た目は、短髪よりちょっと髪の長い帽子かぶった人となる
更に顔が分からないように髪を前に下ろして目元が見えなくなっている。だからさっき地味とか言われたんだろう

「じゃ、めんどいからこれで最後な」

「え〜、もう終わりなんですか。じゃあ最後に高畑先生と親しそうでしたけど・・・親しいんですか?」

タカミチとの関係ねえ

「ただの友人といえば友人だが、いい相談相手でもあるな。お前等も困ったときはタカミチに相談しろよ。
じゃ、授業を始めるぞ〜」

・
・
・
・

キ〜ンコ〜ンカ〜ンコ〜ン

「と、もう時間だな。じゃ、勉学に励めよ〜、少女達よ」

第9話「残念！まだ原作には入らない！」（後書き）

どーもー、お久しぶりです。しばらく更新しなくてすみません。そして次こそは原作に入りますよ

第１０話「主人公の来襲、そして副担任がパシリ扱いになる！？の巻」

「はい、今日のＨＲはこれでおしまい。お前等とっとと家に帰れよ」

今日も適当に職務をまっとうし、とっとと職員室に戻ろうとしたとき

「先生、今日どうしたの？なんか機嫌悪そうだけど。あ、もしかして彼女に振られた？」

と、生徒たちに言われた。

彼女なんていないが、機嫌が悪いと言われたことに何か感じる。そういえば最近なんかおかしい。言葉遣いが変わるのは新月か満月の時の夜だけだったのが、ここ最近じゃいつもだし。

何故か感情の起伏が激しい。まあ、おそらく魂が馴染んできたのかな？だが、それは関係ないだろうし。

となると、何か別のことに苛立ってるのか？

まあ、こんなこと考えてもしょうがない。とっとと戻るか

「俺に彼女なんていねーよ。気のせいなんじゃねーの？」

普通に答えたら朝倉が「ふむふむ、先生は彼女がいないと」と何かメモってた。俺のことを取材しても意味ないぜ

「んじゃ、２度目になるがとっとと帰れよ～」

そしてドアをくぐり抜けようとしたら『ガラッ』っと開いた。開けたのはタカミチだ

「ちょうど良かった、零。学園長が呼んでるよ」

「学園長が？一体何の用事だ？」

俺の記憶には呼ばれるような事をした覚えはないんだがな。さては遊〇王か？いや、多分違うな。今週の水曜日に『第９２回　マホラ女子中等部教師陣　遊〇王大会』があるからデッキを見せるはずないし。

・・・何かやったかな？ダメだ思い出せない

「さあ？君がいつもの様に何かやったんじゃないのかい？」

「おいおい、俺を悪戯っ子みたいに言わないでくれよ。俺は生まれてからこれまで、一回も人に迷惑をかけたことがないのが自慢なんだぜ」

・・・まあ嘘だがな

ん？何をやったかって？そりゃ、タカミチのロリコン疑惑だったり、熟女好き疑惑だったり。

・・・嘘だよ嘘、そんな蔑んで目で見ないでくれ。ちょっと侵入者をボコボコにしちゃっただけだよ

「ま、行ってくら」

・

・

・

「失礼します」

「おお、待っとたよ」

扉を開けるとそこにはぬらりひょんが・・・ってこのネタもうやったか

「で、俺を呼んだ理由は？」

「いきなりじゃのう。もうちょっと老人と会話せんかい。
ま、よい。読んだ理由はの、新任の教師が明日来るのでな、朝のHRが始まる前にこっちにきて欲しいのじゃよ」
あ～、そっかそろそろ原作だったのか、すっかり忘れてたよ
「分かった8時ごろに来るよ。んじゃまた明日」

～翌朝、学園長室前～

「学園長先生！私はこんなのが教師になるなんて反対です！」
いきなり怒鳴り声が聞こえたと思ったら神楽坂か。・・・怒鳴り終わるまでここで待ってるか
・
・
・
・・・そろそろ終わったかな？
「失礼、そろそろいいかな」
「む、お主か、いいぞい」
そう言われて入ると神楽坂が詰め寄ってきた
「先生！私はこんな奴が先生なんて反対です！」
「そう、言われてもねえ。学園長の決定だから俺にゃ、どうしようもないんだよ」

そういうとしょうがないといったふうに

「私はあんたみたいなのが先生なんて認めないんだから！」

と、ネギ少年に言って去っていったのだった（ちなみに木乃香嬢もついて行った）

「んで学園長、この少年は？」

「おお、説明がまだだったの。この子はウェールズの魔法学校から来た、ネギ・スプリングフィールド君じゃ。君のクラスの副担任として、頑張ってもらおうかと思っとる」

「なるほど、ってあれ？じゃあ、タカミチはどうなんだ？」

「高畑くんは出張が多いじゃろ？つまりはそういうことじゃ」

ああ、だから神楽坂はあんなに怒ってたのか

「なるほろね。で、この少年は今日からうちに来るのか？」

「うむ、たのんだぞ」

「あいあい、んじゃネギ君ついてきてくれ」

「あ、はい」

・

・

・

「あ、あの」

「うん？なんだい」

「さっき学園長と話してたことなんですけど」

話してたこと？・・・ああ、魔法のことか

「そうだよ、俺も関係者だ」
「そうなんですか、よかった～」
そう言ってホッっと息をついた
おそらく不安だったのであろう

「そういえば、君の泊まるところって、決まってるのか？」
「あ、はい。さっきのあの人の所に、泊まる予定だったんですけど」
「あの様子じゃ、無理そうだな。まあ、そんときゃ俺の部屋に止まればいいさ」
「いいんですか？」
「困ったときはお互い様さ。あ！それとホレ」
「なんですか、これ？」
「出席簿、とついたな。じゃ、ちょっと待ってろよ」

・
・
・

「はい、てめーら朝のＨＲ前に、人によっては嬉しいお知らせと悲しいお知らせがあります。
さて、どっちから選ぶ。今日は１２日だから、んじゃ和泉」
「なんでうち！？関係ないでしょ！？」
関係ないとか言ってるが、関係大有りだぞ
「おいおい、よく考えろよ。１２に２で割って更に２で割って２足せば。ほら５」
「先生、そんなの普通、考えないと思います」

その言葉に俺は鼻で笑って

「俺の辞書に普通なんて文字はない」

精一杯のドヤ顔で切り返した

「ほれほれ、とっとと答えろみんな待ってるぜ」

「じゃ、じゃあ。悲しいお知らせから」

「じゃ、悲しいお知らせな。

今日、このクラスの副担任。高畑・T・タカミチが副担をやめて出張専門の人、通称パシリ役になりました」

この言葉に教室のみんなが「な、なんだって〜」という顔をした

「少なくとも今日はいるから、質問は本人を見かけたら聞いてくれ。じゃ、次の嬉しいお知らせな。

タカミチが抜けた穴を、埋めてくれる新任の先生がきました。ネギ君入ってきてくれ」

俺の言葉に反応して扉のむこうから「ハ〜イ」と声がした

そしてテクテクと教卓まで歩いて

「きょ、今日から皆さんに、まほ・・・英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです。これからよろしくお願いします」

その言葉と共にみんなが少年に群がってきた

「・・・マジなんですか」

俺に話しかけてきたのは、長谷川千雨。特記せべきところが特にない子である

「マジなんだよ」

俺の言葉に絶望したようにガックシといった擬音が似合うポーズを取る

・
・
・

～授業はいたって平凡だったので飛ばして放課後～

俺は今、歓迎会のためにネギ少年を連れ回してくれと言われたので、少年を探してる最中なのさ。

と、いたいた

「やあ少年、これからちょいと時間は空いてるかい？学園の中を案内しようと思ったんだが」

「あ！え～っと」

何故か少年が言いよどんでる。何故？・・・って、名前言ってなかったな

「すまんすまん、忘れてた。俺の名前は四季崎零。気軽に零って読んでもいいぜい」

「うん、わかったよ零。それと学園の案内を頼むよ」

・
・

・
「んで、ここが広場だな。あとほかに気になるところはないか？」
「うん、もうバッチリだよ」
「そうかなら良かった」

ふと時計を見る・・・もういい頃合かな？と思い「一回戻らないか」
といおうとしたとき

「あ」

と、声を発した

「どうした？」
「うん、そのあそこに、ほら」

指を差したので、その方向を見てみると
フラフラとした足取りで、大量の本を持っている宮崎がいた。
ありゃ落ちそうだな、と思ってたら宮崎から見て左側、すなわちこっち側に寄ってきた。
落ちてきませんように、絶対落ちてきませんように。と願いながら
万が一のために走る準備をしておく。が

「きゃ」

本当に落ちやがった

「ちくしょう」

あらかじめ走る準備をしていたが、間に合うか間に合わないか位の
スピードで落ちていく。だがネギ君が風の魔法を使ってくれたおか

げで減速した。これで間に合うはず
結果は
「セーフ、ギリギリだがセーフ。ありがとな、ネギく…ん？」
振り返るとネギ君の姿はなかったが、気配を探ると神楽坂かな？がいる。そういやここで見られるんだっけ？なら大丈夫だろ
ま、今はこっちだな、まずは宮崎を起こさないと
「宮崎～、起きろ～」
声をかけながら顔をペチペチと叩く。そうすると宮崎がうっすらとまぶたを開け
「きゃっ、だ、誰ですか～」
と、言い距離をとった
「誰？って俺に決まってるだろ？マホラ女子中２－Ａ担当、四季崎零に」
「せ、せんせ～はもっと髪が短いですよ～」
若干涙声で言われた。髪が短くない？不思議に思って頭に手をやると、帽子がなかった。なるほど、帽子がなかったから別人に見えたのか。
さっきの風の急いでどっか飛んだかな？周囲を探すと、すぐ近くに帽子があった。何時もみたいに無駄に長い髪の毛をサッっと入れれば、はい、いつもの俺
「ほら、これでいいだろ。だからちょっと、その涙目やめろ」

まだ若干涙目のため、落ち着けるために優しく頭をなでる

「あわわわわ～／／／」

・

・

・

「さっきはすいませんでした」

「別に構わないよ」

あの後なだめるのに少々時間がかかった。今は宮崎の持ってた、本を図書館に返して、今はだいたい教室の前あたりだ。

もう歓迎会が始まってるのかな？若干うるさい。しかし担任と友達がいない状態で始めるなんてなかなかひどい奴らだな、おい。まあいい

「もう始まってるな。宮崎、早くいかねーと終わっちまうぜ」

「あ、はい」

ガラッと音を立てて教室に入ると案の定ネギ少年が揉みくちゃにされていた。がんばれよ～。俺は団子とか食ってるから

その後、タカミチに読心術を使ったりしてたが、俺には関係の無いことだった。

あ、それと、神楽坂がネギ少年を許したらしい。やったねネギ君

第１０話「主人公の来襲、そして副担任がパシリ扱いになる！？の巻」（後書き

今までで一番長い気がするが、今までで一番適当な気がする

第11話「おい、決闘（ドッジ）しようぜ」

あの、少年が来て数日がたった。
その間に惚れ薬騒動があったが、その時のことは思い出したくない。
え？『気になるじゃないか、教えろよ』だって？まあ、簡潔に言うなら何故か俺がかぶってしまっただけさ。そして追いかけられた。
まあ幸いその時のことはみんな忘れてたので、よしとするか
いやー、しかし少年が張り切ってるおかげで、堂々と仕事をサボれるよ。それでこの前、新田先生に怒られたんだがな（笑）
だが反省はするが後悔はしない。だから今日もサボ「うわああ～んセンセーー！！」・・・ろうとしてたんだがねえ

「何があったんだ？」

とりあえず和泉と佐々木に聞いた話によると、校内で暴行があるらしいが。めんどくせえなあ、おい。とか、考えてたら

「先生は普段何もしないんだから、今ぐらい役に立ってよ！」

って涙目で言われた、しょうがないから場所を聞いて歩いてそこまで行ったら、乱闘騒ぎになりかけてた

「はいはい、そこまでそこまで」

そう言って、高等部に掴みかかりそうな神楽坂と雪広の間に割って入った

「うちの生徒が、なんかやらかしてみてーだな。そこについては謝罪させてもらう」

「で、でも先生、あいつらが・・・」
「まあ、そこはだいたい想像つく。あいつらが力ずくで場所をとりに来たんだろ、そこはお前らが大人気ないと思うぜ」
大人気ないという言葉に「ウッ」っと言葉を詰まらせた、自覚があんならすんや。
そして仕方ないといったふうに小さな声で「すいません」と言って去っていった
「あ、あの・・・ありがとう、零」
「まあ、こういうことも偶にあるさ、気にするなよ」

～その日の５時限目～

５時限目とは、飯を食い終わった後の睡眠時間と俺は考えてる。だから俺は、５時限目に授業がこないように必死に頼み込んで、睡眠時間にしようとしたのに
「な～んで俺は屋上に居るんかねえ」
「先生！無駄口叩いてると当てられるよ！」
そう、俺は今、屋上にいる。いや、俺は今の時間は、職員室で寝ているはずなんだ、それが何故か、屋上に来ている。
そうなった理由を簡単に説明すると。
高等部と、中等部の授業内容がブッキングする→なんか少年が捕まってる→場所争い→スポーツで決着を→２－Ａが勝ったらおとなしく引き下がろう、ただしそっちが負けたらネギ君をもらおう→な、なんだってー！？負けたらヤバイ！助っ人を呼ぶか→俺召喚！ってことらしい。

はあ、めんどくさい事このうえないよ。それに俺が出るのは、ちょいと卑怯じゃないか？ということで、俺はボールを投げない止めないという制限をかけておく

ちなみに、今の状況は神楽坂が先制点を取ってグチグチ言い合ってるところだな。

「行くわよ！小スズメ達。必殺・・・」

そう言って投げたボール緩々の小学生でも取れる弱い玉、だが、必殺という言葉にビビって、後ろをむいてたもの、しゃがんでいたものに当たった。

そして2球目も数人あたったとこで、神楽坂が人数が多いのは不利ということに気づいた。

そしてそれに気づいた2－Aはなるべく散るようにしたが、取れなさそうな奴を狙い始めた、その最初の犠牲者として鳴滝が当てられた。ていうか、わざと頭を狙ったっていう感じに聞こえるが、それヘッドアタックっていう反則だぞ。そして次に宮崎を狙うと堂々と宣言して投げたが、っておい！宮崎！俺を縦にすんな

「よっと」

まあ、俺が当たる訳もないので普通にキャッチ、取らない、投げないと決めてたんだが。ずっと持ったままだと反則になるので、適当に当てて跳ね返ったのを神楽坂がキャッチ、そして全力投球したが高等部の一人（英子と言うらしい）に止められた。そして自分たちが麻帆良ドッジ部『黒百合』ということを明かした。

こっちからドッジボールは小学生までの遊びじゃないの？とか聞こえてくるが、それは違うぞ

「ドッジボールってのは、ちゃんと正式なスポーツとして認定されてるぞ、日本ドッジボール協会とかも存在してるし」

俺の言葉に「へー」という言葉が聞こえてくる。だが、世の中には更に意味のわからない『ペン回し協会』なんてものがあるんだぜ？ちなみに相手は、俺がしゃべってる間にトライアングルアタックだとかなんとかを放ち、雪広が当てられて、更にもう二人当てられた。そして必殺　太陽拳とやらに神楽坂が当てられた。・・・そこまでは良かったんだけどね、2回当てる必要はないでしょ。うん

つーわけで、俺も遊びようの本気を出す。だが、神楽坂がいなくなってせいで士気がガタ落ち。しょうがない、ちょいと励ますか

「『諦めることは誰にもできるが、諦めないということは誰にも出来るわけではない。』ってよく言わないか？まあ行ってなくても構わないが。でも諦めたらそこで試合終了とは言うよな？少年」

「は、はい！そうですよ皆さん。さっき明日菜さんが言ってたじゃないですか後ろをむいていたら狙われるだけだって。前を向けば、ボールを取れるかもしれないんです。が・・・頑張りましょう！！」

俺たちの言葉にやる気を取り戻した奴が何人かいるが、それでも沈んだ顔をした奴がいる

「で、でも。どうやってボールを取ったら」

そこはやっぱり、俺の出番かな？

「そこはちょいと任せろ」

「え、でも先生。運動系は苦手なんじゃ」

何故か知らんが、みんな俺は運動が苦手なんじゃないかと思ってい

るが。なぜだ？トラップの所為か？初日は避けたじゃん！それ以降は当たってるが

「だいじょーぶさ、これは運動とは関係ないから」

そして俺はボールを持ってる英子ちゃんに近ずいていく。その際に時計のタイムウォッチ機能をつけて

「さっきから全然投げてこねーけど、どうした？ほら、投げてこいよ。確か、トライアングリアタックだっけ？それと大胸筋とやらを」

「トライアングルよ！！ト　ラ　イ　ア　ン　グ　ル！それに、大胸筋じゃなくて太陽拳！どこをどうしたら間違えるのよ！！」

「いやあ、ごめんごめん。いまどき小学生でも、そんな安直なネーミングは付けないからな、ついうっかり間違えちまったよ（笑）それよりいいのかい？」

「何がよ」

「時間だよ、時間。ほら」

時計を見せると

「なっ！？」

「そう、5秒ルール。卑怯だなんて言うなよ？お前らだって勝つためならなんでもすんだろ？」

・

・

・

その後、みんなの活躍によって見事勝利したのだった。おれ？あれ以外は何もしてないよ。

みんなが勝利に喜んでると英子ちゃんが「まだロスタイムよっ！！」

と言って球を打とうとしてるが、何故バレーのレシーブ？バレー部に入れよ。
さすがに打つのは見過ごせないので、靴を思いっきりすっ飛ばしてボールを弾く

「っ！」

邪魔した俺が憎いのか、俺をにらんでくる英子ちゃん。だけどね

「勝負に何が何でも勝とうとするその意思は認めるよ。だけど試合が終わってもいがみ合うのは、どうかと思うぜ？
もうちょっと、軽くやってもいいんじゃないか？何かを賭けず、ただ楽しむだけの遊びとして。
そりゃあ、試合に遊ぶつもりで行けなんて言わないが、負けても『いい勝負だった』と思えるくらいに肩の力を抜いてみろ。
んじゃ、俺はこのぐらいでおいとまするわ、次の授業の準備があるからな」

そう言って俺は去っていった。変わるか変わらないか、それは彼女たち次第だが願わくば、もう少し態度が軟化することを願っているよ。・・・まあ、変わらなくても構わないんだが

第１１話「おい、決闘（ドッジ）しようぜ」（後書き）

誤字、脱字有りましたら教えください

第１２話「俺がかっこいいことを言う理由？ただの暗示さ」

先日のドッジボール件から早、数日間。その間に期末試験があったり、その結果ネギ君が正式な副担任なったりした。
そして今日、正式な教員として雇うことを正式に発表した。
・・・まあ、それを快く思わない人も少なからず居るんだが。主に新田先生をはじめとする普通の、魔法とは何も関係ない一般の人とかがね。
俺にはあんま関係ないんだがね。ま、それはそれとして、何故か『学年トップおめでとうパーティー』というものが開催されようとしている。
まあ、俺に止める権利もねえから別にいいか。
それに俺も参加したいし、つーわけで飲み物や食い物を、買っていこうかな～と思って外に行こうとしたとき、なにやら悩んでいるネギ君の姿が見えた。
気になったので事情をうかがってみると、どうやら長谷川が体調が悪いどうのこうの言って帰ったことが心配で、ついていこうとしてたようだ。
だが、この『学年トップおめでとうパーティー』はネギ君が帰らないでよかったという意味も混じってるので、その主役がいなくなるのはどうかと思ったので、俺が代わりに行くことになった

・
・
・

んで、長谷川の部屋の前にいるんだが・・・どうしよ？
ノックしても出てこないようだし・・・鍵開いてるし・・・入ってもいいのか？
・・・よし、はいろう。変態なんて思うなよ？ネギ君に任せろ的な

ことを言ってしまったんだから、しょうがないだろ？俺は約束は守るタイプの人間なんだぜ？つーわけでガチャっと、失礼、こんにちわー

・

・

・

何か色々あったけど面倒くさいのでキンクリキンクリ、結果だけを簡潔に話すと、最終的にはなんか同士と認められた俺は、ちゃんと着替えた長谷川と共にパーティーへと向かうのであった

～そして数日後の放課後～

最近、吸血鬼だか、チュパカブラだか知らんが、満月の夜に桜通にいる生徒が襲われる。という噂が流れている。
それにより学園長から自分のクラスの子くらい見守ってくれたっていいじゃない。という依頼が来たので受けることにしたのだった。
だが学園長、あまり俺を信頼しないほうがいいぞ？この前の木乃香を連れ戻してくれだって、最終的には裏切ったじゃないか。そんな奴を信頼するなんて・・・いいのか？いいんだろうな、きっと

ふむ、しかし、これは間違いなくあいつだよな

「やっぱり、マクダウェルだろうな」

「私がどうかしたか」

こぼした言葉に反応してきた人・・・否、鬼がいた。

「ん？おいおい、マクダウェルに絡繰か、もう放課後だ、用事がないなら、さっさと帰りな」

「話をそらすな、質問に答えろ。爺の部屋で何を話していた」
質問に答えなかったことにイラっときたのか、少々怒気を放ちながら質問をしてきた
「ちょっと、お説教がされただけさ」
「嘘をつくな、ならば何故私の名前が出てきた」
ありゃりゃ、見破られちまったか
「嘘じゃないさ、一から十まで教えると面倒くさいが、学園長が『生徒のテストの点数が低かったのは、お主のせいじゃ』って、説教されてねえ。
実際、ネギ君が教鞭をふるったら、この前バカレンジャーが、高得点を取っただろ？それで俺も誰かにいい点を取らせなきゃいけねえのかな～。ってな」
「なるほどな、教師というのも大変なのか。だが、なぜ私なのだ？」
間違ってしまって恥ずかしいのか、若干早口のようだ
「マクダウェル、お前ちゃんとテスト受けてないだろ。見たところ、ちゃんとテストをやれば、かなりの上位になれるはずだろ。それにお前が本気を出せば、絡繰もちゃんとテストを受けるはず。ほれ？一石二鳥」
「なるほどな、だから私なのか。だが残念だったな、私はまじめに受けるつもりなどない」

「・・・そっか、本人がそういうのなら仕方がないか。絡繰、お前はどうだ？」

「申し訳ございません、従者が御主人（マスター）を越える従者は失格とのことなので・・・」

ふむ、どっちも失敗か。まあ嘘だったからどうでもいいんだけど

「そうか、ならしょうがない。じゃあ明日な」

「ああ、そうだな」

「さようなら、先生」

と、そういえば、ひとつ言い忘れてたことがあったな。それを言わないと

「そういえばマクダウェル、いや『闇の福音』今日が満月だからって、血を吸いすぎるなよ」

その言葉に反応して、マクダウェルがバッとこちらを振り向いたが、残念、俺はもうそこにはいない

なにやらマクダウェルが「やはり魔法使いだったか」とか言ってるけど、ありゃりゃりゃ？バレてたの？まあ、バラすつもりだったけどじゃ、気をつけて帰れよ？マクダウェル。聞こえないだろうがな。クックック

・　・

・

・
現在午後6時過ぎ。あの後、俺は学園長から受けた依頼もあって、桜通りの桜の上で待機している。
てか、これって意外とつまらないな、おい。もう辞めたくなってきたよ
次、俺の生徒が来たら帰ろう、すぐ帰ろう。うん、そー決ーめた。ってあれ？あれ宮崎じゃん。ラッキー！つーわけで、俺のお仕事モードはこれにて終了。そして帰るために、木からバッ！っと飛び降りる

「ヒッ！！きゅ、吸血鬼！？」

いきなり飛び降りてきたせいで驚かせてしまったようだ

「吸血鬼？残念、人間でした」

「え？？ん～？？あ！！せんせ～」

「ピンポンピンポン、だ～いせ～いか～い。おめでとう、のどかちゃん正解したご褒美は何もないけど、賞賛してあげますよ？」

「え、えっと？先生ですよね？」

「そーだぜぃ？よくぞ初見で我を見破った。とか言っちゃたりして。いや？のどかちゃんは一回見てるから初見ではないか」

いま言ったように俺の格好は普段しまってる髪を全部だしてるから所見じゃわからない。分かる奴は魔力の違いで識別する奴ぐらいだろう

「ま、とりあえず口調とか質問したいだろうが、それよりここは物騒だから送ってやるよ」

「え？あ、はい。お願いします」

そんな感じで今日のことは終わったのだった。

しかし、マクダウェルが仕掛けてこなかったなあ。と思っていたところ、次の日綾瀬が襲われたんだって、ネギ君が助けたけど。

第１２話「俺がかっこいいことを言う理由？ただの暗示さ」（後書き）

エヴァの態度が柔らかくない？と思う人がいるでしょう。申し訳ありません、キャラがつかめなくて、結果的にこうなってしまいました。本当に申し訳ない

第13話「あ～らら、ばれちった」

さてさて、先日の綾瀬が襲われた件が学園長にバレてしまったので、説教を受けることになりかけたが『ネギ君の修行のためです（キリッ』と言ったら簡単に許してくれたのであった
それでいいのか？　麻帆良学園。ま、俺にとっちゃ、むしろ良かったんだが

あ！　あと宮崎に口調の説明をした結果納得してくれた。え？　どうやって説明したかって？仕事とプライベートは分けてるって言っただけさ。実際は月の魔力で体内の魔族が活性化して、性格が変わってるだけだが

さて、いまは放課後、本来だったら今日も桜通りを見張ってないといけないはずだが『ネギ君が知っちゃったからもう任せきりのほうがいいんじゃね？』とのことなので、空いた時間を潰すために猫たちと戯れることにした

「こい！　ネコ共！　今日はどのように撫でて欲しい？　腹か？　喉か？　耳の裏か？　いいだろう、全て撫で尽くしてやる！」

公園の中心に立ってそう叫ぶと、あちらこちらから猫が出てきて俺に擦り寄ってきた

いや～、ここまで懐かせるの本当に大変だったんだよ
最初は近くに寄るだけで逃げ行ったからね。俺にはムツゴロウさんのようにゴットハンドは持ってないから、懐かせるために試行錯誤を繰り返したのさ。そして試行錯誤を繰り返した結果、右腕に微弱な睡眠魔法と回復の術式を書き込んで、少々の魔力を加えれば！

あら不思議、あっという間に骨抜きに！
すごいだろ～、緊張とか恐怖とかも和らげることもできるんだぜ～。
これがあったからのどかちゃんに怯えられなかったんだぜ。つまりこれは男性恐怖症な彼女も安心させることができる、最強な右手なのだ！

「お久しぶりですね、方識さん」

と、脳内でみなさんに自慢しているところ、いきなり後ろから声をかけられた

「む、その声と呼び方は茶々丸ちゃんか、久しぶりだな」

「ええ、お隣よろしいでしょうか」

「ああ、構わないぜ。というか俺、邪魔じゃね？　なんならもう帰ろうか？」

実際には久しぶりではないがな、毎日学校であってるし。あ、ちなみにいまの俺の姿は髪を下ろしているだらけバージョン。だから俺が誰だかわからないんだろうな
それと方識ってのは俺の零崎としての名前な、夜の警備の時以外、全然出てこないけど

「いえ、構いません」

「そうか、なら良かった」

そう言ってまた猫たちを撫でようとしたら、猫たちが全員茶々丸の方に行ってしまった。ちくしょう・・・・・じっと見てようかな

？　と思ったが、邪魔するのもあれなので帰ることにしようかな～とか考えてたら3つの気配を感じた。ふむ、ネギ君と神楽坂、それと小動物・・・・・使い魔か？　ちょっと待てよ、この時期のネギ君は一体何をしようとしてた？　・・・・・そうだ！　確か茶々丸を襲おうとしてたんだっけか？　じゃあ俺が邪魔で実行に移せないということか。・・・・・しょうがない、帰るフリをするしかないか

「猫は茶々丸ちゃんの方がいいみたいだから帰るね。じゃ、また今度」

「はい、また今度」

・
・
・

そしてある程度離れていってから気配を消し、髪に集めてる影を刺青に戻し、気を消し、さっきの場所へともどった

「おー、やってるやってる」

そして戻ったら明日菜ちゃんと茶々丸ちゃんがデコピン合戦をしていた、なんでデコピンをチョイスしたかわからないけど
ふと、魔力の流れに異変を感じたので、ネギ君に視線を戻すと、茶々丸ちゃんに向けて魔法が発動されていた。
そして茶々丸ちゃんは避けられないと分かるとなんかごにょごにょ言ってた。
そしてネギ君を見ると・・・・・止める気はないようだ。しょうがない、出るか

「ストップだ、ここでの魔法の使用を禁止する」

そう言って茶々丸ちゃんの前に出て、魔法が当たる前に茶々丸ちゃんを助け、そのまま連れ去る

「あ、あなたは。なぜ、助けたんですか？　方識さん」

そう言って茶々丸ちゃんは、驚いたという表情を浮かべながらこちらを見ていた。それは当然だろう。この姿は魔法先生としての姿で、ここの魔法使いは全員エヴァを敵視している、だからエヴァの従者である茶々丸を助けるはずがない。そう思ってるんだろうが俺はあくまで先生だからね、生徒に危険があるならそっちを優先させるんだよ

「友達を助けるのに理由がいるかい？　て、あれ。なんで正体わかった？」

「友達・・・ですか、私は機械ですよ？　骨骼、声紋などから判断しました」

「機械だろうがなんだろうが、俺が友達だと思えば友達だ。なるほど、それでバレたのか」

「そうゆうものですか？　他にもあなたが四季崎先生ということが分かりました」

「そうゆうものなんだよ。まじで？　エヴァには内緒にしといてくれない？　と、ついたな」

「それは・・・」

言いよどんでいるな、さすがにだめか？

「ま、無理だろうし・・・んー、聞かれれば答えていいけど、聞かれなかったら教えないでくれない？　ちなみに答えは聞いていない。じゃ、さらば」

「あ！」

そう言って俺は家に帰った。

・・・・・・エヴァにバレなければいいなーと思いながら

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0375o/

タイトル未定（結構のりで書いてますから駄作です）

2011年11月29日22時54分発行